

顧客と仕入れ先の間に立つ商社として、 良い塩梅を探りつつ日本のものづくりを繋ぐ。

1967年、日本で初めてアルミホイールの製品化を実現したエンケイ株式会社。静岡県浜松市に本社を構え、国内外でアルミホイールのトップシェアを誇る。今では世界企業になった同社の商社機能を担う会社として設立されたのが、鈴興株式会社である。「自動車業界ではEV（電気自動車）一択の様相ですが、さまざまな可能性を残すのが日本の良さ」と、代表取締役社長の鈴木博彦氏は世界の風潮を冷静に見据える。

鈴木

興は1970年に、エンケイ（創業時は遠州軽合金）の創業者であり、博彦氏の祖父にあたる鈴木建次氏が設立した。1960年代にアメリカでアルミホイールが大ヒットしていることを知った建次氏は、アルミ鑄造技術者としての腕を活かして製造に成功。品質の良さから1967年にアメリカへの輸出が決まり、1973年から国内での販売を開始した。

「アルミのインゴットや工場を使う資材を仕入れ、エンケイに卸したのが鈴興の始まり。工場を稼働させるためのLPG（液化石油ガス）やLNG（液化石油ガス）、製造工程で使う油脂材料を扱い、1973年にエンケイのアルミホイールを扱う問屋の役割も担うようになりまし

た。さらにエンケイのグループ企業以外にも取引を拡大。今では1000種類以上の商品を扱っています」。

そう話す博彦氏が子供の頃に抱いていた目標は、プロサッカー選手になることだった。中学校の卒業と同時にブラジルに渡り、2部リーグのユースチームに所属。プロ契約を目指していたが、2年目に右目に網膜剥離を発症してしまふ。急遽帰国し、計6回に及ぶ手術を受けたものの、右眼を失明し、プロへの道を断念。手術や失明のショックから精神疾患を患い、1年以上の闘病生活を余儀なくされた。

「病気が完治した頃、父からうちの会社に来ないかと誘われました。事業はエンケイ関連が中心ですが、商社として成長するために、他分野にも挑戦しています。2007年から始めたLED照明は、大手企業が参入する前に韓国から輸入。病院や書店といった、これまでとは業種の異なる顧客を開拓できたのは大きな経験になりました」。

大切にするのは、創業時から「人々の企業理念である「人間尊重、相互信頼、共存共栄」だ。人間尊重は、人を尊重しないと前に進まないことを意味する。この気持ちがなければ相互信頼が生まれることはなく、人間尊重と相互信頼が備わった時に共存共栄が生まれる。」

経営理念は「客信社事」。「客」は顧客、「信」は信用・信頼、「社」は社会・社会貢献を指し、この3つを満たした時に仕事を表す「事」が発生するという。さらに、「皆で輪をつくる」という行動指針を掲げている。

「鈴興の社員は26人ですが、仕入れ先の企業の社員が1万人だとすれば、弊社には1万26人の社員がいるという考え方です。お客様の企業の社員が5万人なら、5万人全員がお客様なのだから営業先は無数にあることになります。こうした教えを何度も伝えることで、社員の間力を鍛えたい。創業時から在籍する75歳の社員が今も活躍するなど、地道に取り組んできた結果、半世紀以上も会社が続けてきたのだと思います」。

ゼロ

ロカイチのデジタル化が進む中で、もっとも気にしているのは、日本の自動車産業の行く末だ。浜松市はホンダ、スズキ、ヤマハの創業地であり、建次氏は本田宗一郎氏とも親交があった。2035年以降も条件付きでエンジン車の販売を容認したEUだが、依然としてEVの普及を推進。いっぽう日本を代表するトヨタは、EV以外にPHV（プラグインハイブリッド車）やFCV（燃料電池車）、など、さまざまな選択肢の可能性を残している。

「コロナ対策のマスク着用にしても、優柔不断でルールがはつきりしないのが日本の特徴。しかし、クリスマスも初詣も受け入れる曖昧さや、調和や情緒を重んじることが日本の良さではないでしょうか。ガソリン車がEVに置き換わると、日本の自動車産業が大きな打撃を受けるのは自明。必ずしも白黒をつける必要はなく、良い塩梅を探っていくことが日本には向いていると思います。そう感じるのは、私たちが商社だから。以前に商社不要論が巻き起こった頃、仕入先と顧客が直接取引したことがありましたが、意見の対立でトラブルが勃発しました。両者の要望にバランスよく耳を傾けながら、ものづくりを繋ぐことが私たちの使命です」。

エンケイのアルミホイールの製造は、多くの工程が機械化・ロボット化されているが、最後の完成検査は目視で行われる。仮に表面に不具合があれば、原因は塗装なのか、それ以前の工程で使った潤滑油なのか、といったことも鈴興は調べなければならない。商社といっても現場との関わりが深く、こうした関係性が製造業を支えている。

「遠州（静岡県西部）の人は手先が器用な反面、自身のことをアピールするのは得意ではありません。祖父が鈴興を立ち上げたのは、自分たちの事業を世の中に知ってもらいためという目的もあったと聞いています。商社としてさまざまな活動を行うことで、日本のものづくりに寄与することを目指しています」。

CHALLENGER

The
Extra Edge

世の中のトレンドをリードする
話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介

SUZUKI HIROHIKO

鈴興株式会社 代表取締役社長

鈴木博彦

1981年静岡県生まれ。プロサッカー選手を目指し、15歳でブラジルに単身留学。練習中の怪我が原因で右目に網膜剥離を発症し失明。19歳で父が経営する商社の鈴興株式会社に入社し、2016年に代表取締役社長に就任。燃料、油脂、薬品、金属、資材、照明など、1000種類以上の商品を扱う。